

グローバルマネジメント学部の誕生に寄せて

長野県立大学学長
金田一真澄

1. 本学の立ち上げ

長野県立大学には、グローバルマネジメント学部（GM学部）と健康発達学部がある。GM学部は全学生定員の3分の2強を占める本学の中核学部であり、看板学部でもある。まず長野県立大学の設立から話を始めたい。

きっかけは四半世紀ほど前、県短大の卒業生による短大の4年制化への要望を目的とする12万の署名活動があった。その要望は、ようやく8年前の阿部知事の時代に取り上げられ、知事の指示により、有識者を揃えた設立準備委員会が設置された。そして2年かけて4年制の総合県立大学の基本構想案が作成されたのである。その基本構想案は新たな時代に相応しいかなり理想の大学をめざしたもので、本学は他の県立大学にはない、思いきった教育を行う大学となった。それが最も反映しているのが、県短大にはなかったGM学部の新設と全員参加の海外研修である。一方で地域や県短大に対する配慮もあり、健康発達学部が同時に創られ、結果として、二つの全く文化の異なる学部を持つ県立総合大学となった。

一般には、短大の教員が4大化の構想案をつくるために、画期的な構想は出にくく、既存の教員たちができる範囲の教育研究内容を、学部学科の名称だけ現代風にして提出することが多かった。本学では第三者である有識者を中心に構想案を練ったことが、高い理想をめざした新大学を誕生させる結果となったのであり、これは阿部知事の英断でもあった。しかしそのために、二つの問題が生じた。県内にある同じ学部内容をもつ松本大学と松本市から強硬な反対運動が起きたことと、県短大から4年制の大学に移ることができない教員の処遇問題（学部学科が変更されたため）である。

基本構想案が発表されて1年後の今から5年前に、長野県立大学の理事長予定者と学長予定者が発表され、安藤理事長と私がこの大学に関わることとなった。その最初の仕事が、松本の反対運動を鎮めることだった。長野県立大学設立に対して10万の反対署名を集めた松本市に出かけ、新大学設立の説明会を開き、反対者が9割以上という、完全なアウェイの中で、安藤理事長と並んで新4年制大学設立の意義を説明した。安藤理事長は終始毅然として、新大学の高い志と長野県における意義を話された。初めの1時間は、全く

聞いてくれる様子がなかった。ところが理事長の熱い思いが徐々に聞く人たちに浸透していき、ヤジがやみ、最後にはこちらの設立の熱意に対して、温かい拍手が起きたのである。帰りの車の中で、安藤理事長が、「こんなことは株主総会の修羅場を経験している人間にとっては、なんでもないことです」と語った言葉が印象的だった。松本大学との確執は今はないと考えている。もう一つの問題となった短大から4年制大学に移れなかった教員については、大変気の毒な思いをさせてしまった。新たな教育の世界で仕事を見つけられることを、心から祈るばかりである。

2. グローバルマネジメント学部の成り立ち

「グローバルマネジメント学部」という名称は、初め「総合マネジメント学部」だったのだが、松本大学に同名の学部があったことから、熟慮の末一步譲って「総合」を「グローバル」に変更した。

次に安藤理事長と行ったことは、本学に相応しい教員の採用面接である。新しい学部であるGM学部には、全国から大勢の教育熱心で、様々な専門性を持った教員が集まってきた。臼井先生のように海外からも来てくださった。県短大の教員もすべて面接と模擬授業によって新大学への採用の可否を決めた。一方で、GM学部の学部長をお願いできる人がなかなか見つからなかった。たまたま安藤理事長のソニー時代の知り合いで、首都大学東京の研究科長などを歴任され、大学運営にも長けていた森本先生を紹介され、彼に学部長をお願いした。本学が開学する2年前のことで、新大学の立ち上げにも大きな力を発揮してくださった。

マネジメントという学問分野についての知識は殆どなかったが、このGM学部に集結した先生方を見て、ぜひ「専門ゼミ」を充実させたいという思いに駆られた。理由は3つ。一つは少人数教育で教員と学生との距離が近い教育を行うことが地方の小規模県立大学にとって必須であり、ゼミはそれを最も実現しやすい授業形態だからである。二つ目は、マネジメントという若い学問では、教室での座学だけでなく、実践的なフィールドワークや、現場に行つての社会勉強などが極めて有益であり、そのためには各教員がある程度裁量をもって動ける授業が望ましいと感じたからである。三番目は、教育熱心で学問的魅力を持った個性的な教員がGM学部到大勢集まったことである。もしも、教育に対していい加減な教員が集まっていたら、ゼミ形式の教育は成立しない。しかし今回集まった教員は、魅力的な専門世界の面白さを学生たちにきっと体験させてくれるに違いないと強く感じたのである。こうした理由から、2年次以降の専門ゼミに力を入れられるカリキュラムを森本学部長にお願いし、ゼミの単位の比重を増やしてもらった。

これからは、高校生が志望大学を選択する理由として、「あの先生に学びたいから」という時代になっていくはずである。発信力ゼミも、教員と学生との距離の近い授業であり、うちのGMは1年次から4年次までゼミがある大学と言えなくもない。ゼミで極めて高い教育評価を得ている武蔵大学にも負けない親身な教育が期待できる。

3. グローバルマネジメント学部の特徴

本学の特徴である1年次全寮制と2年次全員海外研修は、6年前につくられた基本構想案からすでに掲げられていたものである。全寮制については長野市を地盤とするある議員から、自宅から通えば無料なのにとクレームをもらったが、これからの大学は学力だけではなく、人間としての力を磨くところでもあり、自律、協調性、社会性、思いやり、コミュニケーションなどを身につけられる寮生活は、極めて意義のあるものとする。寮は単なる寝泊まりするだけの場ではない。更にまた近い将来、留学生たちが来た時の受け皿ともなる。

一方、全員参加の短期の海外研修を実現するために、柔軟に対応できる4学期制を導入した。4学期のうち1学期間だけを海外に行くことで、本学での学修期間のロスができる限り少なくし、4年間できちんと卒業できるようにした。秋田の国際教養大学AIUは素晴らしい大学だが、1年間の留学を課しているために、5年かかる学生が非常に多いと聞いている。大学には学生をできるだけ4年間で社会に送り出す使命があるはずである。本学の海外研修プログラムについては、中条先生が精力的に世界中の大学を飛びまわり、まだ本学が開学していない厳しい状況の中で、海外の一流大学と独自の研修プログラムの契約交渉をして、協定を結んでくださった。しかも他大学にはない、専門の内容をもつ優れたプログラムである。彼がいなければ、全員海外研修は実現できなかったであろう。

4学期制の導入と同時に施行した100分14回の授業システムは、少しだけ夏休みや春休みを長くして、学生も教員もリフレッシュすべきだという思いと、授業中にディスカッションをする時間をとるには、100分ぐらいが必要と考えて導入した。ただ、4学期制では週2回という縛りが時間割の調整を難しくしている面があり、100分授業には、いかに学生に飽きさせない授業をするかという課題が教員に突きつけられている。

ソーシャル・イノベーション創出センターCSIについても、一言触れたい。このセンターの活動の素晴らしさについては、改めて説明するまでもないので、ここでは県立大学としての存在意義の視点から述べたい。現在、公立大学は国立大学の陰になり、国立大学の規模の小さいのが公立大学だというぐらいの認識しかない。公立大学の使命はまずは地域貢献であるが、ある程度の地域貢献は、国立も私立もやっている。したがって、県立大学の地域貢献は県の地域貢献にとって不可欠な“重要な役割を担うもの”であるべきと考える。県行政の進め方は公平の原則によって、一部の地域だけを偏って支援することは難しく、必要な計画や予算も前もって決めなければならないといった、様々な制約がある。県立大学のセンターであれば、より柔軟に動ける利点を活かして、より効果的な地域貢献を果たすことができる。県立大学と県とが地域の振興に対して役割を補完し合う関係を築くことが、これからの県立大学の目ざす姿であろう。CSIは大室先生を中心とした経験豊富なスタッフにより、まさにそのモデルケースの役割を果たしている。CSIに対する長野県民の期待、そして他の県立大学の注目度は極めて高い。

その他、本学では、企業のトップや地元で活躍している人に依頼して、オムニバスで授業を行う象山学や、9名の英語専任教員を中心とする、週4回のレベル別英語集中プログラムなど、魅力的な授業が数多く開講されている。ここではいちいち名前を挙げることはしないが、開学にあたって多くの先生方のお世話になった。心よりお礼申し上げます。

4. 終わりに

最後に、本学の特色についてもう一言、つけ加えたい。本学には今までの大学にはない大きな特色がある。ICUやAIUは、現在全国的に高い人気を誇り、グローバルな素養としての英語と教養を身につけることが売りとなっている。しかし、本学にはこれらの大学にはない強みがある。それは専門をきちんと学び修めるということである。ICUはリベラルアーツ教育が基本であり、AIUは教養大学である。これからの時代、拠って立つ専門があることは絶対であり、教養は専門という前提があって、はじめてその真価を発揮するものである。専門が核となり、その周りを教養が包み込むことで、専門がより広く活性化し、深みを増すのである。本学では、専門として、経営学、栄養学、幼児教育学がきちんと身につくように学ばせている。その上で、全員が短期ではあるが、その多感な時期に海外研修に参加することが原則として義務付けられている。専門が何であれ、世界を自ら体験し、グローバルなセンスや視野を身につけることが、これからの時代、すべての大学生に求められているのである。

大学とは、学生たちに知識やスキルを教えるだけでなく、むしろ人生の生き方を学ばせる場だと考えている。また一方で、大学とは人類の英知を継承・発展していく使命を持つものでもある。その使命のために、このジャーナルがいくらかでも世界に貢献できることを願って、この駄文を閉じたい。